## 慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	福澤家の家計と交詢社会計の新資料
Sub Title	
Author	佐志, 傳(Sashi, Tsutae)
Publisher	慶應義塾福澤研究センター
Publication year	1995
Jtitle	近代日本研究 Vol.12, (1995. ) ,p.265- 270
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-19950000-0265

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 福澤家の家計と交詢社会計の新資料

佐 志

傳

られているように、「平成六年明治古典会七夕大入札会」に を一巻にまとめた巻子本のうちの一点と、六通一括の書翰の のうち当センターが落札したものは七通であるが、これも 残り九通はすべて新史料というべきものであった。その九通 澤諭吉年鑑』に収録されているものはわずか二通に過ぎず、 書翰だけでも十一通あり、そのうち『福澤諭吉全集』や『福 おいて入手したものである。このとき出品された福澤史料は 翰類を新たに収蔵することができた。その経緯はすでに触れ 「明治名家書簡巻」と題された明治期十四名の著名人の書翰

九九四年夏、福澤研究センターでは幾通かの福澤諭吉書

その史料を掲げ若干の解説を加えるが、原文通りを旨として 全部が福澤諭吉直筆の覚書と言ってもよいであろう。以下、 澤家の家事にたずさわっていた人物になっているから、六通 家の金銭出納に関わるものが多く、したがってその宛先も福 整ったものではなく、連絡用のメモ的な内容であって、福澤 分れる。ただし、後述するように、書翰と言っても形式の

その一 百十九銀行宛 (明治二十八年九月十三日付)

筆者の加筆は句読点に留めた。

記

金千六百円也

二点である。そしてここで紹介するのはそのうちの後者、六

一括の分である

この六通の書翰は厳密に言えば五通の書翰と一通の覚書に

右福澤於錦の名義を以て特別當座預之義、

候。以上。

宜敷奉願

福澤

百十九銀行 御中

書である。宛先の百十九銀行は、福澤が明治十八年から三十 これは書翰の形式をとってはいるが、要件のみを記した覚

「第百十九銀行即ち三菱」とあって、その「出の部」の明治 一年にかけて自ら記録した金銭の出納簿『諸口差引大帳』に、

二十八年と思われるところに

千六百圓 九月十四日

お錦名義にて

なお、お錦名義の特別當座預金としては、同二十八年十月三 とある。「同斷」はその前文七月九日の条に「特別當座預け(1) がって、この書翰は明治二十八年のものと見てよいであろう。 にて」とあるから、金額、名義人、預金種類が第一の書翰に 一致し、日付が書翰の翌日となっていることがわかる。した

その二 宛名不明 (明治三十年十月?二十二日付)

十一日付で五千円というのも記録されている。

案内ニ尚忘れたる者あるが如し 貴之時節柄壱円五十銭ニ致度、宜敷御取斗奉願候。

料理を壹円三十銭と命したるよしニ承候得共、物価騰

此節出府 恒さんの弟 [甥]

金杉英五郎

此外矢野文雄さんハ

案内したるや否

御取斗奉願候。

一ゑびすビールを凡百人前、

紅葉館ニ持出候やう、是亦

昨夜来差支之向ハ

旅行 鈴木

同断 肥田 久\_昭 也彌作

同断 久保 岩崎 扶桑

井上角五郎

同

先ツヶ様ニ御座候。以上。 二十二朝

明治二十年代末から三十年代にかけて、二十三、四日ごろに 書翰の文面から百名以上の客を招待しての宴会であるから、 この書翰は宛名が切り取られ、発信年月も不明であるが、

る。そして雨天の場合は翌二十四日に順延とあるが、その予(2) その案内状は十月十五日付で活版印刷によって発送されてい 三十年十月に広尾の別邸で園遊会が催されているのに気付く。 開催された大宴会を全集の年譜によって当ってみると、明治

三輪光五郎 小杉轍之助

郎である。

当日の己录よ十月二十六日(火))『寺真所最」(這)測通り雨が降って園遊会は二十四日に開かれている。

郎、三井八郎次郎、長与専斎、ナップ、ドロッパース、論吉のは三十名ほどで(例えば木村芥舟、田中不二麿、小村寿太三百余名も集まったとある。来会者の氏名が記載されている三百余名も集まったとある。来会者の氏名が記載されている・に載せられている。前日の雨で道路もわるく曇りがちの号)に載せられている。前日の雨で道路もわるく曇りがちの号)に載せられている。前日の雨で道路もわるく曇りがちの号)に載せられている。前日の雨で道路もわるく曇りがちの号)に載せられている。

甥」とするのが正しい。金杉恒は千葉県出身の内務官僚だっ英五郎の頭註に「恒さんの弟」とあるが、これは「恒さんの矢野文雄等の氏名は見当らないのは残念である。なお、金杉いう。出席者のなかに右の書翰に記されている三輪光五郎やいう。出席者のなかに右の書

濬等)、一名の婦人をも交えない「清淡」な会合であったと

たが子供がなかったので兄の子、英五郎を養嗣子としていた。

英五郎はドイツに留学して彼地で耳鼻咽喉科医学を学び、斯

きなかったのでその祝文を福澤に代り朗読したのが金杉英五(明治三十一年九月二十六日)に脳出血症により倒れ出席で澤は親友長与専斎の還暦賀宴に祝文を贈ったが、その二日前学を日本に伝えた著名な医師で、のち貴族院議員となる。福

上半期は慶應義塾にとってある意味では、その存廃問題が真どうか、その開催趣旨はもとより不明であるが、明治三十年ところで、この日の園遊会は何か特別の目的があったのか

たるまで、社頭の福澤が直接指示を下しているのではないからに、料理の単価にビールの本数や、招待者名簿の確認にいうに、料理の単価にビールの本数や、招待者名簿の確認にいりな時期に企画された園遊会であるから、この会合は義塾社で大学部を拡張して慶應義塾の主体とする案を発表し、幼稚さな時期に企画された園遊会であるから、この会合は義塾社りな時期に企画された園遊会であるから、この会合は義塾社りな時期に企画された園遊会であるから、この会合は義塾社りな時期に企画された園遊会であるから、この会合は義塾社りな時期に企画された園遊会であるから、この会合は義塾社りな時期に企画された園遊会であるから、この会合は義塾社りな時期に登画された園遊会であるから、と関係と関係と関係と関係といるのではないからに、料理の単価にビールの本数や、招待者名簿の確認にいるのではないからに、料理の単価にビールの本数や、招待者名簿の確認にいるのではないからに、料理の単価にビールの本数や、招待者名簿の確認にいるのではないからに、料理の単価にビールの本数や、招待者名簿の確認にいるのではないからに、料理の単価にビールの本数や、招待者名簿の確認にいるのではないからに、料理の単価にビールの本数や、招待者名簿の確認によるのではないからに、料理の単価にビールの本数や、招待者名簿の確認にいるのではないからに、対しているのではないからに、対しているのではないからに、対しているのではないから、というないのではないから、というないから、というないのではないから、というないのではないから、というないのではないから、というないのではないから、というないのではないからないがあります。

その三 交詢社会計局宛(年未詳八月十二日付)と想像される。

式円。作花なれい三円位之處『而可然哉。何れ』而も宜敷別紙之通り之次第『而花を贈度候』付而者生花なれい凡

御取斗安藤氏之宅へ届け度奉願候。

以上。

諭

交詢社会計局 御中

八月十二日

尚以二円三円三元見苦しければ今少し大くしても不る語を含語具。

苦候。

た文面である。「安藤氏」については現在のところは不明で 藤氏」へ花を届けてくれることを、交詢社の会計局に依頼し 冒頭の「別紙」は遺されていないが、何らかの理由で「安

その四 岡本貞烋宛(年未詳八月十九日付

社へ差出し候。宜敷御取斗奉願候。い才之義ハ木原承知第六銀行ゟ別紙之通申参候"宀、其人をそのまゝ交詢

之事ゆゑ同人江御申聞奉願候。要用のみ。匆々如此御座

候。頓首。 八月十九日

諭

吉

尚以老生も午後ハ出社之積ニ御座候

以上。

宛先の岡本は明治十二年から交詢社の創設に関わり、同十

用を辨じてゐたやうだ。」とある。この書翰は筆跡から見て 五年に時事新報が発刊された後は、新聞社の庶務を担当して 君は当時先生の秘書兼福澤家執事といふ格で、内外何呉と雑 なことをしていたという西谷虎治の回想談によると、「貞烋 いた人物で、明治十五、六年ごろは時事新報社の給仕のよう

木原

様

宜敷御願申し候

明治十五、六年ごろというほど早くはなく、一括されている

第六銀行宛の福澤書翰は三通『全集』に収められていて、(4) 澤が自己の資金を預けている主要銀行の一つであり、現に、 他の書翰類とほぼ同年代のものと見たい。福島第六銀行は福

目がある。この第六銀行からきた「別紙」が遺されていない る。「木原」は次の書翰でふれる。 ため、大帳の記載とつき合せることができないのは残念であ 

その五 木原寅吉宛 (年月日未詳)

来客断り追て

\_ 東田

純一

伊藤茂右衛門

右両名唯断申参候

又別ニ思出し案内致度ものハ

笠原 恵

依田今朝蔵

諭 吉

ある会合の出欠についての連絡メモというべきものである。 この書翰は発信年月日を欠くものであるが、内容からみて、

第

以上にわたってその名前が記されており、いずれも福澤家の『金銭出入帳』(明治二十四年~三十年)には、五十ヶ所の『金銭出入帳』(明治十八年~三十一年)や同じような内容にあると同時に福澤家の金銭出納の事に当っていて、既述の任会計局に勤務していた木原寅吉と思われ、交詢社の会計の任宛先の「木原」は第四の書翰にもふれられている、交詢社の

承りたし。

不動産関係の金銭の出し入れ、税金の支払等を行なっている。

けての既述と思われるから、二十八年における木原寅吉は、の一括された書翰類は明治二十七、八年から三十年ごろにかの一括された書翰類は明治二十七、八年から三十年ごろにかの一括された書翰類は明治二十七、八年から三十年ごろにかの一括された書翰類は明治二十七、八年から三十年ごろにかの一括された書翰には、省末に、第十十八年九月二十九日付鏑木誠宛の福澤書翰には、鏑木明治二十八年九月二十九日付鏑木誠宛の福澤書翰には、鏑木明治二十八年九月二十九日付鏑木誠宛の福澤書翰には、鏑木

その六 覚書 (明治二十七年九月カ

十五、六年ごろの岡本貞烋に準ずる仕事を福澤に任せられて

いたものと思われる。

百弍拾三円

福澤諭吉生命保険

福澤三八教育同

合て右之高毎年九月七日拂ふ所、本年ハ諭吉之分のみ

を解し難し。依て拂ふものハ拂ふとして会社之説明を之義ニ付云々申し来候得共、詳なる説明なきゆゑ其意案内して三八之事ハ無沙汰なり。加之過日何か割戻等

八」と命名された。三八が誕生すると翌々九月から父諭吉は福澤家に第八子で三番目の男児が誕生した。その子は「三という項目の内容と対応している。明治十四年七月十四日、この覚書に関する記述は『諸口差引大帳』の「保険掛金」

が、明治二十七年は九月十二日に「諭吉分払」として六十七九月七日(十八年は八日、十九年は六日)に拂込まれている金は明治十四年から同二十六年まで十二年間、几帳面に毎年の教育・結婚の将来計画をたてていた。諭吉・三八の保険掛三千円(毎年の掛金六十七円二十銭)に加入して、子供たち

円三十五銭のみが記載されており、三八分は大四郎と共に加

入した保険分のみである。覚書中にある「割戻」は「過日」 と言われた木原寅吉の近辺の者が所蔵していたものではな

かと推察される。

請取りとして千五百円が記載されている。したがってこの覚 銭が入金されており、二十七年九月十二日には三八分の満期 とあるが、実は一年前の二十六年九月六日に二十三円三十六

この「保険掛金」の項目は同じ金額を毎年記載するのが億

書は三八分満期直前の、明治二十七年九月に記されたものと

劫になったためか、諭吉は明治三十年二月の記載分の後に 「以下例の通り掛け遣す面倒ゆゑ一々記さず」とあって、以

り、それらが一括して出品されたという点を考慮すると、こ に述べたように書翰と言えども内容は覚書のようなものであ 以上五通の書翰と一通の覚書を紹介したのであるが、最初

れらの新史料は交詢社の会計をあずかり、福澤家の家人同様

注

(1) 『福澤諭吉全集』(以下、単に『全集』と略記) 第二十一巻 三七ページ。

(2)『全集』第十八巻八○七ページ。

(4) 明治二十二年六月二十九日付、同二十三年五月八日付、同年 (3) 『福澤諭吉伝』第三巻二三九ページ。

八月七日付、以上いずれも『全集』第十八巻三〇六、三七八、四

(5) 『全集』第二十一巻七八ページ以下。 一〇ページ。

(6) 『全集』第二十一巻四五〇ページ。

さし つたえ 慶應義塾高等学校教諭